

かわ はら だに でみず
川原谷出水遺跡

携帯電話無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 26 年 3 月

宮崎県都城市教育委員会

序 文

本書は、平成 24・25 年度に携帯電話無線基地局建設に伴って発掘調査を実施した川原谷出水遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書です。発掘調査では、縄文時代草創期ならびに縄文時代早期の集落の一部と考えられる遺構・遺物が見つかりました。この時期の資料はまだ都城市内での事例も少なく、当該期の集落の様相を考える上で重要な成果となりました。

これら先人の残した文化財を守り引き継いでいくことは、私たち都城市民の責務でもあります。本書を通して、こうした地域の歴史、文化財に対する理解と認識がますます深まる事を願いますとともに、調査で明らかとなった成果が今後の学術研究発展に少しでも寄与できれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査から本書刊行に至るまで事業者であるソフトバンクモバイル株式会社九州技術部様をはじめ作業に従事していただいた市民の皆様、関係各機関・個人に多大なるご理解・ご協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

都城市教育委員会
教育長 黒木哲徳

例 言

1. 本書は携帯電話無線基地局建設に伴い、発掘調査した川原谷出水遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用したレベル数値は海抜絶対高で、基準方位は座標北（GN）である。使用した座標数値は国土座標（世界測地系）に基づいている。
3. 本書の遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・写真的番号は一致する。
4. 土層と遺物の色調は『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠した。
5. 現場における遺構の実測は作業員の協力を得て加藤淳一、谷口めぐみが中心となってこれを行ない、文化財課主査山下大輔の協力を得た。
6. 遺構の写真撮影は加賀が行なった。
7. 本書に掲載した遺構のトレスは株式会社 CUBIC の「トレスくん」並びに Adobe「Illustrator CS3」を用いて加賀が行なった。遺物の実測・トレスは文化財課主査中園剛史、同原栄子、加賀が行なった。
8. 本書に掲載した遺物の写真撮影は加賀が行なった。
9. 本書の執筆・編集は加賀が行なった。
10. 発掘調査および報告書作成にあたり、岩永哲夫氏より出土土器について御助言をいただいたほか都城市文化財課栗畠光博・栗山葉子・山下大輔の諸氏から出土遺構・遺物について御助言いただいた。
11. 本書中における遺構略記号についてはそれぞれ、土坑 = 「SC」、集石遺構 = 「SS」、土器の集積 = 「SX」で統一している。
12. 出出土器の分類・報告に際して、下記文献を参考とした。
雨宮瑞生 1994『南九州縄文時代草創期土器編年』『南九州縄文通信』No.8 南九州縄文研究会
黒川忠弘（編）2002『南九州貝殻文系土器1～鹿児島県』南九州縄文研究会
高橋信武 1997『平塚式土器と窯ノ神式土器の編年』『先史学・考古学論究Ⅱ』龍田考古会
13. 発掘調査で出土した遺物と全ての記録（図面・写真など）は都城市教育委員会で保管している。

目 次

本文目次

第1章 序	1	4 縄文時代早期の成果	10
1 調査に至る経緯	1	I . 集石遺構 (SS)	11
2 調査の組織	1	II . 土坑 (SC)	12
第2章 遺跡の位置と環境	2	III . 土器の集積 (SX)	14
1 地理的環境	2	IV . IV層出土遺物	15
2 歴史的環境	3	IV - 1 土器	15
第3章 調査の成果	5	IV - 2 石器	16
1 発掘調査の方法と概要	5	5 時期不明の遺物	17
2 川原谷出土遺跡の基本土層	6	遺物観察表	21
3 縄文時代草創期の成果	9	第4章 調査のまとめ	22
I . 土器	9	写真図版	23
II . 石器	10	報告書抄録	28

挿図目次

第1図 川原谷出土遺跡と周辺の遺跡	3	第9図 SS1・SS2実測図	12
第2図 調査地点位置図	4	第10図 SS3・SC1実測図	13
第3図 トレンチ配置図	6	第11図 SX1・出土土器実測図	14
第4図 調査区東壁土層断面図	8	第12図 IV層遺物出土状況平面図	15
第5図 VII層遺物出土状況平面図	9	第13図 IV層出土遺物（土器）	18
第6図 VII層出土遺物	10	第14図 IV層出土遺物（土器②）	19
第7図 縄文時代早期遺構配置図	11	第15図 IV層出土遺物・時期不明の遺物（石器）	20
第8図 IV層散在検出状況平面図	11		

挿表目次

第1表 川原谷出土遺跡出土土器観察表	21	第2表 川原谷出土遺跡出土石器観察表	21
--------------------	----	--------------------	----

図版目次

写真図版 1	23	写真図版 4	26
写真図版 2	24	写真図版 5	27
写真図版 3	25		

第1章 序

1 調査に至る経緯

平成 24 年 3 月 6 日、株式会社トーエイ電設より都城市梅北町 11125 番地 2 における文化財所在の有無について照会がなされた。工事計画は携帯電話無線基地局建設で、対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「川原谷出水遺跡（遺跡番号：M7021）」内に位置していることから、これを受けた都城市文化財課では事前の確認調査を平成 24 年 4 月 17 日に実施した。確認調査では携帯鉄塔建設予定地に 2×2 (m) のトレンチを設定した。確認トレンチを掘り下げて調査した結果、鬼界アカホヤ火山灰（Ⅲ層）よりも下位のオリーブ黒色粘質土（Ⅳ層）から土器や礫が多量に出土し、縄文時代早期の遺跡が良好な状態で残存していることが明らかとなった。また、薩摩火山灰層（Ⅵ層）より下位のⅦ層からは剥片が出土しており、縄文時代草創期以前の遺跡が残存している可能性も考慮された（注1）。

上記の結果を受けて、文化財課は事業者と協議を重ね鉄塔基礎工によって遺跡の破壊を免れない範囲（約 64m²）について記録保存するための発掘調査を実施することで合意した。

平成 24 年 11 月 20 日には本工事の事業主体であるソフトバンクモバイル株式会社九州技術部より文化財保護法 93 条第 1 項に基づく発掘届出が提出された。この後、ソフトバンクモバイル株式会社九州技術部と文化財課は平成 25 年 2 月 8 日に「川原谷出水遺跡に関する協定書」を締結した。このことにより、対象地点の本発掘調査を平成 25 年 3 月に実施し、報告書作成は翌平成 25 年度に実施することが取り決められ、発掘調査・報告書作成に係る費用はソフトバンクモバイル株式会社九州技術部が負担することも併せて取り決められた。同日付けで川原谷出水遺跡埋蔵文化財発掘調査業務委託契約も締結され、現地での発掘調査へと移行することとなった。

現地での発掘調査は平成 25 年 3 月 13 日に着手した。当初、3 月 31 日までの期間で発掘調査を実施する予定であったが、調査開始が当初のスケジュールよりも遅れたことや天候不良によって現場作業が遅延したため、調査途中で変更契約を取り交わし、委託期間は平成 25 年 4 月 19 日までとなった。このため、平成 25 年度へ調査期間が延長された。このような経過を経て現地における発掘調査は平成 25 年 4 月 8 日に終了した（実調査日数 15 日間）。

平成 25 年度には報告書作成業務委託契約を締結し、報告書作成業務へと移行した。

注 1）都城市教育委員会 2013 「都城市内遺跡」 6 都城市文化財調査報告書第 110 集

2 調査の組織

（発掘調査） 平成 24 年度・平成 25 年度

・調査主体者	宮崎県都城市教育委員会	酒匂 酔以
・調査事務局	教 育 長	池田 文明
	教 育 部 長	新宮 高弘
	文 化 財 課 長	松下 述之
	文化財課副課長	栗畠 光博
	文化財課主幹	加賀 淳一
・調査担当	文化財課主査	

(報告書作成) 平成 25 年度

・調査主体者	宮崎県都城市教育委員会	
・調査事務局 教 育 長	酒匂 酔以 (平成 26 年 2 月 24 日まで)	
	黒木 哲徳 (平成 26 年 2 月 25 日から)	
教 育 部 長	池田 文明	
文 化 財 課 長	新宮 高弘	
文化財課副課長	松下 述之	
文化財課主幹	栗畠 光博	
・報告書担当 文化財課主査	加賀 淳一	

発掘作業従事者

原田貢 上西政実 木本保 吉盛五恵子 下津佐ミエ子 塩屋貴士 中園剛史

整理作業従事者

免田友香理 矢上由香利

第 2 章 遺跡の位置と環境

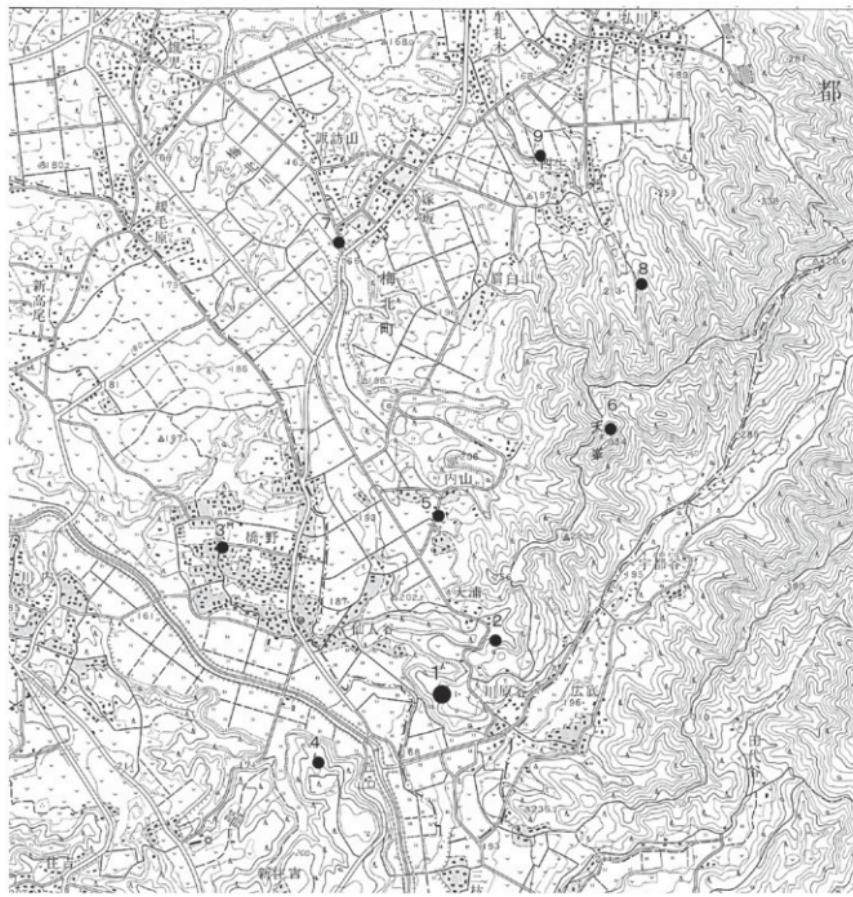
1 地理的環境 (第 1 図・第 2 図)

川原谷出土遺跡は都城市梅北町に所在する。遺跡の所在する梅北町川原谷は行政区画的に見れば、市内でも最も南の地域に位置している。すぐ南には鹿児島県曾於市が控えており、この地域との境界となっている。都城盆地は盆地の南北を縱貫する大淀川を挟んで東に扇状地地形が発達し、西にはシラス台地地形が発達するという地形特徴を持っている。調査地点はこの都城盆地の南端付近にあたる。調査地点は天ヶ峯（標高約 359m）を最高所とした丘陵から南へと派生する台地縁辺部に位置しており、標高は 207 ~ 208 m 程である。今回の調査区はこの台地縁辺でも極めて落ち際に近い場所に位置している。

調査区のある台地の南西下には大淀川が北流しており、市街地方向へと流れ込んでいる。この低地との比高差は約 40m ある。また、調査区より東の台地下には小河川が流れしており、調査区よりも西で大淀川へと合流している。この小河川の両岸に沿うように現在の地区集落は展開している。

調査区周辺について細かく見てみると、現在では鶏舎が建てられ地形が著しく改変されているが、調査地点の北側には東へと入り組む谷があったようである。地区住民の話によれば、この地点にはかつて湧水点も存在していたとのことである。調査区周辺では、戦後間もなく耕地整理が行なわれたとのことであり、実際にトレンチ内の土層断面の観察結果では上位の土層が削平を受けている状況も見て取れた。周囲には切土による地形改変の痕も複数箇所認められることから、本来、調査区周辺は緩やかな起伏を持った地形であったことが推測される。

調査区付近の標高をみると 208m 台で推移しており、遺跡の位置する台地の東から西にかけて緩やかに傾斜している状況が確認でき、南西方向へと下っていく地形変化を読み取ることができる。このように調査区周辺では台地地形が広がっており、この平坦面上に遺跡も形成されたものと考えられる。



1 : 川原谷出水遺跡 2 : 千手院跡 3 : チサノ木遺跡 4 : 平松城跡 5 : 大浦遺跡 6 : 天ヶ峯陣跡 7 : 鰐坂遺跡 8 : 西生寺跡
 9 : 梅北佐土原遺跡

第1図 川原谷出水遺跡と周辺の遺跡 S = 1/25000 国土地理院発行 1:25,000 東吉を改変

2 歴史的環境（第1図）

川原谷出水遺跡の所在する市内南部では、これまでにも幾つかの発掘調査が実施されているが件数的にはまだ少ない状況にある。ここでは川原谷出水遺跡周辺における遺跡の様相を時系列的に取り上げながら概観してみたい。川原谷出水遺跡周辺では、これまでのところ旧石器時代にまで遡る遺跡は見つかっていない。遺跡が確認できるのは縄文時代以降となる。

縄文時代の遺跡は、川原谷出水遺跡周辺では、大淀川を挟んだ対岸のシラス台地上にある平松城跡（曾



第2図 調査地点位置図 S=1/10000

於市）において石坂式土器や塞ノ神A式土器などの縄文時代早期の土器のほか縄文時代後期の土器も見つかっている。このほか梅北佐土原遺跡においても縄文時代早期の遺構・遺物が検出されている。遺構は集石遺構のほか落し穴状遺構も検出されている。遺物は吉田式土器、別府原式土器などが見つかっている。

川原谷出土遺跡よりも北方に位置する野添遺跡では縄文時代後期の堅穴住居が複数見つかっており、該期の集落跡と考えられる。このほか、安久町に所在する王子原遺跡でも縄文時代後期の堅穴住居が見つかっており、該期の集落跡と考えられる。

弥生時代に入ると、川原谷出土遺跡よりも北へ約1km離れた大浦遺跡において弥生時代中期の堅穴住居が検出されており、該期の集落の存在が明らかとなっている。この他に周辺において弥生時代の遺跡は見つかっていない。

古墳時代遺跡の調査事例も少なく、様相は不明瞭である。ちなみに都城盆地南部では高塚墳は築造されでおらず、高崎塚原古墳群、高城牧ノ原古墳群、志和池古墳群などの主要な古墳群は盆地北部に偏在している。先述した野添遺跡では古墳時代中期の堅穴住居のほかに土坑墓も見つかっており、この時期の墓としては希少な調査事例となっている。

奈良・平安時代に入ると調査事例も増えてきており、王子原遺跡、上安久遺跡、永田藤東遺跡、チサノ木遺跡などが見つかっており、集落跡と考えられる。なかでも曾於市チサノ木遺跡では平安時代の周溝墓・土坑墓が検出されている。近年の発掘調査成果からは市内南部において、平安時代から中世にかけての調査事例が増加する傾向にあり、該期の様相が明らかとなりつつある。調査地点よりも北方約2kmに位置する嫁坂遺跡では中世の水田遺構および道路状遺構が検出されている。

また、市内南部においては平安時代以降に寺院が数多く存在していたことが知られており、調査地点の付近では千寿院跡が知られている。このほかに中世期の城郭もしくはそれに類する遺跡の存在も知られている。先述した天ヶ峯も天ヶ峯陣跡として中世の砦跡とされているが詳細についてはよくわかっていない。また、先述した平松城跡も中世城郭である。

近世以降の様相については、特に集落遺跡の様相はよくわかっていないが、尾崎第1遺跡（貴船寺跡）では近世墓塚が多数見つかっているほか、発掘調査は実施されていないが梅北西生寺跡などの近世寺院跡も見られる。

【引用・参考文献】

鹿児島県立埋蔵文化財センター 1995『平松城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (13)

曾於市教育委員会 2009『チサノ木遺跡』曾於市埋蔵文化財発掘調査報告書 (9)

都城市教育委員会 1997『大浦遺跡』都城市文化財調査報告書第37集

都城市教育委員会 2007『梅北佐土原遺跡』都城市文化財調査報告書第76集

都城市教育委員会 2011『永田藤東遺跡』都城市文化財調査報告書第102集

都城市教育委員会 2011『王子原遺跡 上安久遺跡』都城市文化財調査報告書第103集

都城市史編さん委員会(編) 2006『都城市史 資料編考古』都城市

宮崎県農政水産部農村建設課(編) 1993『南那珂地域 土地分類基本調査 末吉』宮崎県

宮崎県埋蔵文化財センター 2001『梅北佐土原遺跡 中尾遺跡 簗原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第42集

宮崎県埋蔵文化財センター 2002『母智丘谷遺跡 煙田遺跡 嫁坂遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第62集

宮崎県埋蔵文化財センター 2004『豊満大谷遺跡 野添遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第83集

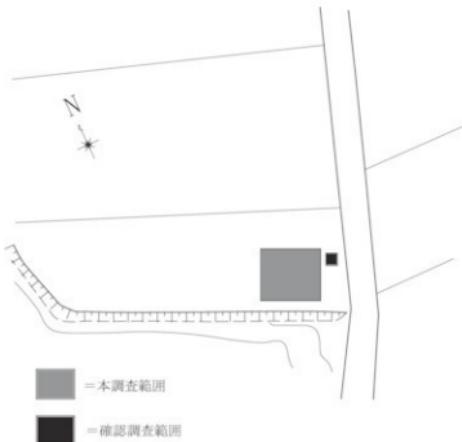
第3章 調査の成果

1 発掘調査の方法と概要

発掘調査は携帯電話無線基地局の基礎工部分をトレーナーとして調査区を設定した(第3図)。調査区が狭小であったことからグリッドによる区割りは実施していない。調査はまず重機によって表土(I層)以下、鬼界アカホヤ火山灰層(Ⅲ層)までを取り除き、縄文時代早期の遺物包含層であるⅣ層を露出させた。

その後、人力による掘り下げへと移行した。掘り出した廃土は調査区外へと搬出した。掘り下げに伴って出土した遺物はトータルステーションによる座標位置を記録後に取上げた。

Ⅳ層の掘り下げが終了した後にさらにV層を掘り下げ、VI層上面にて遺構検出を行なった。この結果、VI層上面で検出された遺構は集石遺構3基、土坑1基、土器の集積1箇所である。VI層からは土器、石器が出土したほか、角礫を主体とした散礫も出土した。検出された礫はそのほとんどが被熱していることから、その大半が集石遺構の廃棄に伴って生じたものと考えられる。これらのうち、約100点は測量機器を



第3図 トレンチ配置図 S = 1/800

使用して座標位置を記録して取上げ、指頭大程度の小さな礫は一括による取上を行なった。IV層から出土し、トータルステーションによって取上げた土器は50点、石器は13点である。IV層から出土した土器型式は押型文土器、変形撚糸文土器、塞ノ神B式土器、辻タイプ、手向山式土器、石坂式土器と思われる土器が確認された。検出された遺構の測量・図化を終えた後、VI層上面のコンターラインを作成した。その後、人力にて薩摩火山灰層（VI層）を取り除き、縄文時代草創期の遺物包含層であるVII層の掘り下げへと移行した。VII層から出土した遺物はIV層に比べると出土点数は非常に少なかった。石器は定型石器が出土しておらず、黒曜石石核・剥片が出土している。VII層を掘り下げ、その後VIII層上面にて遺構精査を行なつたが遺構は確認されなかった。この後、VIII層上面のコンターラインの作成を終えて調査は終了した。

2 川原谷出水遺跡の基本土層

川原谷出水遺跡における基本土層についてみると、表土（I層）より下はプライマリーな土層堆積ではなく、御池軽石層よりも上位が耕地整理等によって削平を受けていた。よって、堆積状況が明瞭な土層はそれよりも下位の層となる。また、調査区内では北東から南西方向にかけての傾斜も認められ、その方向にかけて層序が途切れたり、ブロック状の堆積となるなど不安定な堆積状況を呈する箇所も認められた。

縄文時代早期の遺物包含層であるIV層は傾斜が下るにつれ厚くなっていく傾向が認められた。薩摩火山灰層（VI層）を挟んで下位の縄文時代草創期の遺物包含層であるVII層は安定的に堆積しており、層厚は10～20cmで調査区の全面にわたってほぼ同一の厚さで堆積していた。

また、調査区の北東隅には土層観察・下層確認のために深掘りトレンチを設け、VIII層以下の土層堆積状況も確認した。その結果、複数の粘質土の堆積が確認され、さらにその下層からは入戸火碎流堆積物(A-Ito)に由来すると考えられる堆積物も確認できた。

今回の発掘調査で確認できた基本土層は以下の通りである。

I 層は褐色（7.5YR4/1）砂質土で白色バミス混じる。現耕作土でゴボウトレングレーによる深耕部分があり、その一部は縄文時代早期の包含層であるIV層にまで及んでいる。

II 層はその特徴から二層に分けることが可能である。

II a 層はにぶい黄橙色（10YR7/4）軽石である。いわゆる霧島御池軽石（K-r-M）に該当するもので径1cm以下の軽石が濃集している。ほとんどは上位が削平を受けており、部分的にしか残存していない。

II b 層はにぶい黄橙色（10YR6/4）粘質土で黄色軽石（霧島御池軽石）粒を含んでいる。

III 層は黄橙色火山灰で鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）である。層厚は最大で20cmほどあるがしっかりとした堆積は認められず、部分的に土壤化したり、ブロック状となっている。

IV 層は基本的に褐色で複数の軽石粒を含有する層で縄文時代早期の遺物包含層である。層厚は40～60cmほどの堆積が認められた。含有する軽石粒は桜島P11 テフラに該当すると思われ、拡散したように広範に広がっている。層の色調から二層に分離することができた。

IV a 層はにぶい黄褐色（10YR5/3）粘質土で1cm以下の黄色・白色・褐色バミスが多く混じる。

IV b 層は黒褐色（7.5YR3/2）粘質土でIV a 層と同様に1cm以下の黄色・白色・褐色軽石が多く混じる。

V 層は黒色（7.5YR2/1）粘質シルトで黄橙色・白色軽石をごくわずかに含んでいる。調査区内で層厚10～20cmの厚さで堆積が認められるが、堆積していない箇所も認められた。

VI 層は明黄褐色（10YR7/6）火山灰。いわゆる桜島薩摩火山灰（Sz-S、P14 テフラ）に該当する。非常に硬くしまっている。層厚は最大で20cmほどあるが調査区全面には堆積しておらず、調査区の南西隅にかけてはブロック状に堆積している。

VII 層は褐色（7.5YR4/1）粘質土である。縄文時代草創期の遺物包含層である。層厚は10～20cm程度で堆積している。

VIII 層はにぶい褐色（7.5YR5/4）粘質土である。水分が多く粘性が強い。層厚は最大で30cmほどである。

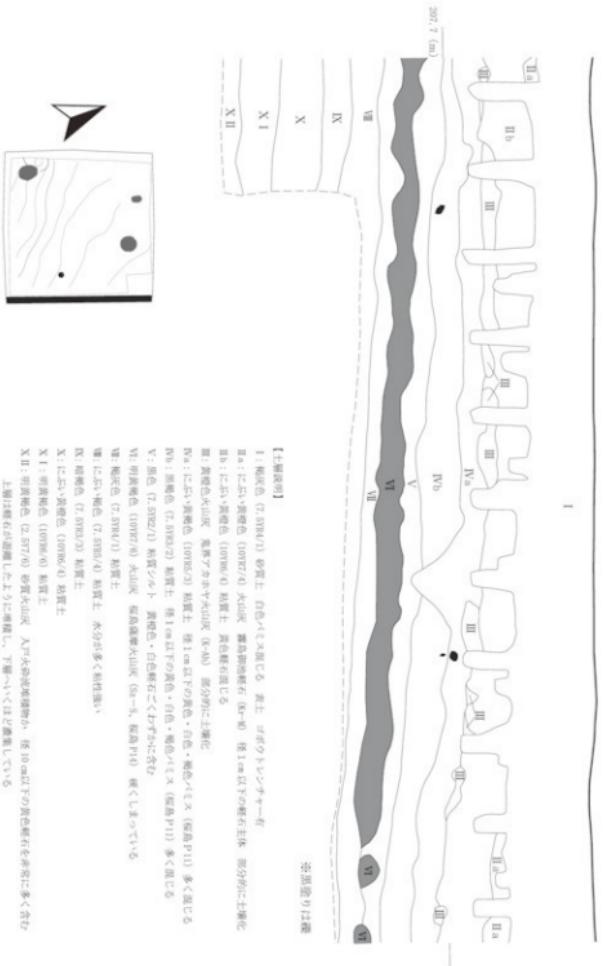
(IX層以下は深堀トレングレーによって確認できた層である。)

X 層は暗褐色（7.5YR3/3）粘質土である。層厚は20cmほどである。

X 層はにぶい黄橙色（10YR6/4）粘質土である。層厚は30cmほどである。

X I 層は明黄褐色（10YR6/6）粘質土である。層厚は30cmほどである。

X II 層は明黄褐色（25Y7/6）砂質火山灰である。10cm以下の黄色軽石を非常に多く含む。入戸火碎流堆積物（A-Ito）と考えられるテフラである。層の上下で様相がやや異なっており、上位では軽石が遊離したようにまばらに混じるが、下部では軽石が下層に行くほど濃集し多量に含まれている。



第4図 調査区東壁土層断面図 S=1/40

3 縄文時代草創期の成果

薩摩火山灰層（VI層）よりも下位の縄文時代草創期に該当するVII層からは遺構は検出されず、遺物が出土しているのみである。その出土量は土器、石器ともに非常に少なかった。

VII層からの出土遺物はトータルステーションを用いて取上げた土器が11点、石器（石核・剥片）8点である。出土遺物の平面分布（第5図）をみても非常に疎であり、土器も細かくなつた小片や摩滅しているものが多かった。VII層から出土した石器のうち定型石器は出土しておらず、黒曜石石核・微細な剥片が出土しているのみである。このほかには被熱した礫が出土している。

I. 土器（第6図）

VII層から出土した土器はいずれも小片となつたものが多く、図化できた資料は10点で、このほか土製品が1点出土している。

これらはローリングしているものが多く、周辺からの流れこみとも考えられる出土状況を呈している。

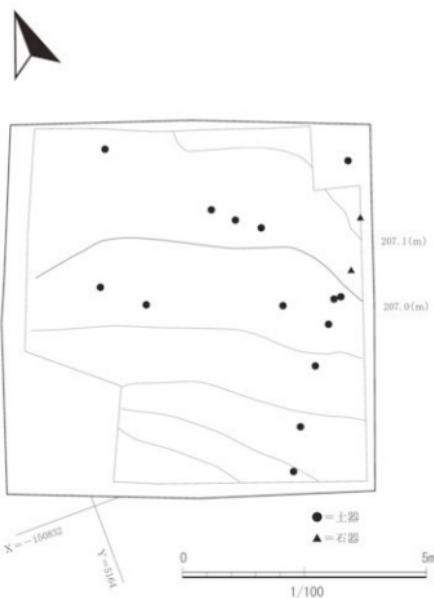
土器の色調についてみると、いくつかに分類することができたが、概して橙色系の色調を呈するものが多い。土器胎土の特徴としては石英・長石・角閃石を含むものが多いほか、砂粒を多く含むものが見られた。

1は深鉢の口縁部付近と思われる土器である。外面には隆文帯が付されており、指頭によって調整されたことが分かる。内面にはオサエの痕が明瞭に残されている。

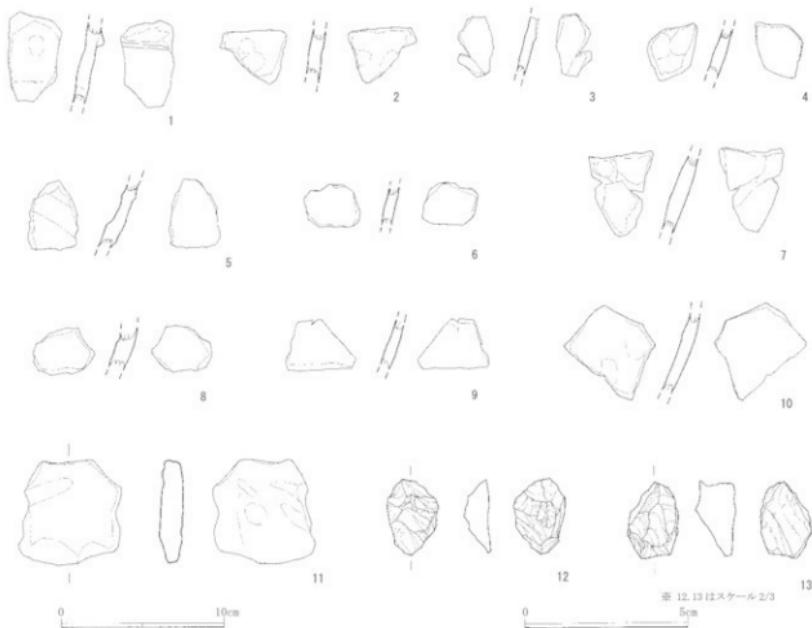
2～10は胴部と思われるものである。

2には内外面ともにオサエが見られる。焼成も良く硬質となっている。3の外面はナデによって仕上げられている。5には内面に強いヨコナデが加えられており、ケズリ状になっている。6は内外面ともナデのみが観察される。7は胴部の下半と思われる破片で内面には部分的にオサエが残っている。10は胴部の下半と思われる破片である。内面にはオサエが部分的に残っている。

11は用途不明の土製品である。不整形の平面に指頭や棒状工具によるものと思われるオサエやナデの痕が残っている。胎土には砂粒が多く含まれており目立っている。焼成も軟質となっている。



第5図 VII層遺物出土状況平面図 S=1/100



第6図 VII層出土遺物 S=1/3・2/3

II. 石器（第6図）

VII層から出土した石器のうち、定型石器と思われるものは出土しておらず、実測図化できたのは黒曜石の石核2点のみである。12、13はいずれも石器製作の過程で生じたものと思われ、12は光を透過すると半透明状に透けて見え、白色の不純物が混じる。13はほとんど光を透過しないのが特徴であり、一部に原石面が残っている。

4 縄文時代早期の成果

縄文時代早期の遺物包含層であるIV層の調査の結果、IV a層・IV b層からは土器・石器が出土した。それに伴って散礫も検出された。調査区内の全域からまんべんなく検出されているが、その密度は高いとはいえない。特にSS3が検出された調査区の南西隅付近においてまとまって検出されているが調査区の北側ではまんべんなく出土した程度である。これらの出土総点数は約100点を数える。調査中に検出された礫の大半は被熱したものがほとんどである。このことから、集石遺構使用後など度重なる礫廃棄の結果、このような平面分布へとつながったものと推定される。

IV・V層をすべて掘下げて遺物を取上げた後、VI層上面で遺構検出を行なったところ、集石遺構3基、土坑1基、土器の集積1箇所が検出された（第7図）。

I 集石遺構（第9・10図）

縄文時代早期に該当する集石遺構は合計3基検出された。調査区の北側、南西側で検出されている。いずれの遺構も上位において散疊が密な状態で検出されている。また、遺構の周辺からは炭化物も出土している箇所も見られる。

SS1（第9図）

調査区の北西で検出された集石遺構である。IV層掘下げ中に多くの散疊がみられ、 0.7×0.5 (m) の範囲に疊が集まっていたため、集石遺構として認定した。疊の下層を精査したが掘り込みは伴っていないことがわかった。検出面はIV b層である。検出された疊はほとんど被熱していた。出土疊は角疊を主体としている。出土した疊の総数は23個を数え、疊の総重量は3.0kgを量る。

SS1からは遺物は出土していない。

SS2（第9図）

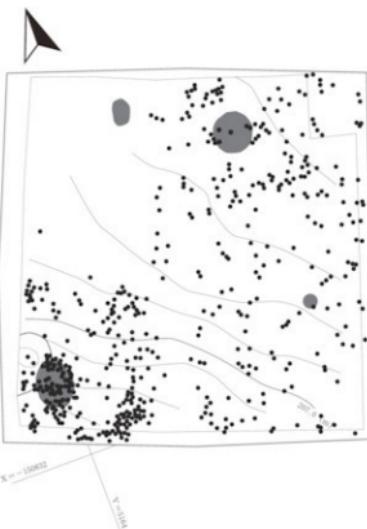
調査区の北東、SS 1の近くで検出された集石遺構である。検出面はVI層（薩摩火山灰層）である。 1.2×1.0 (m) の範囲で検出された。上位では多量の散疊が検出され、徐々に取上げたところで集石遺構が検出された。疊は密な状態で検出され、そのほとんどが被熱していた。出土疊は角疊を主体としている。検出された疊は320個を数え、総重量は59.4kgを量る。

SS2は掘り込みを伴っており、掘り込みのプランは橢円形を呈している。長軸×短軸は 1.0×0.9 (m) を測る。遺構断面形は箱形を呈しており、検出面からの深さは0.2 (m) を測る。埋土はIV b層を基本とする黒褐色土であり、下層付近において少量の炭化物が出土している。

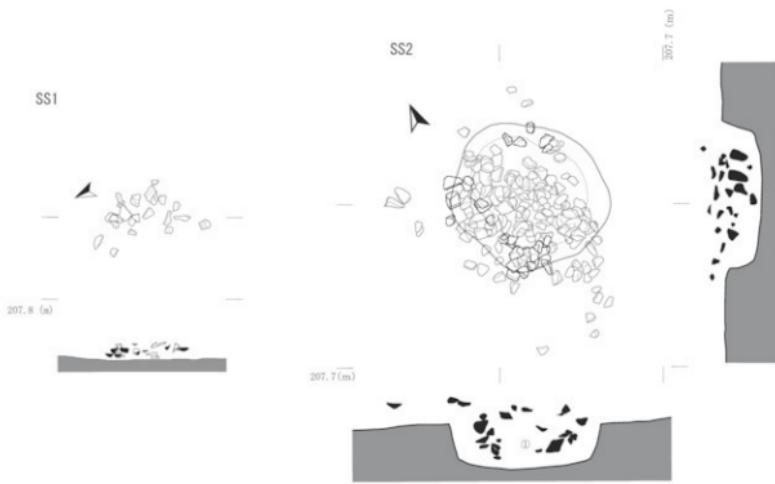
このほかにSS2からは遺物は出土していない。



第7図 縄文時代早期遺構配置図 S = 1/100



第8図 IV層散疊検出状況平面図 S = 1/100



第9図 SS1・SS2 実測図 S=1/30

SS3（第10図）

調査区の南西隅、地形面が北から南にかけて傾斜している地点で検出された。検出面はⅦ層である。上位には多量の散礫が検出され、徐々に取上げたところ下位から集石遺構が検出された。礫は 0.9×0.7 (m) の範囲で検出され、非常に密な状態で検出された。

礫はそのほとんどが被熱しており、焼礫化していたり、炭化物の付着が認められるものもあった。礫は角礫が主体となっている。検出された礫の個数は379個を数え、総重量は90.4kgを量る。

SS3は掘り込みを伴っており、SC1と切り合いが認められた。土層断面を観察したが、両遺構の先後関係は不明である。SS3の掘り込みはプランが楕円形を呈しており、長軸×短軸は 13×1.0 (m)である。遺構断面形は緩やかな摺鉢状を呈しており、検出面からの深さは最大で0.5 (m)を測る。遺構埋土はIV b層を基本とする黒褐色土で底面付近の下層には多量の炭化物が混入していた。埋土中からは実測不可の土器小片が出土しているが、胎土と色調が先述した草創期の土器と似ていることから、これと同時期のものと思われ、下層のⅦ層を掘り込んだ際に混入したものと推定される。このほかに遺物は出土していない。

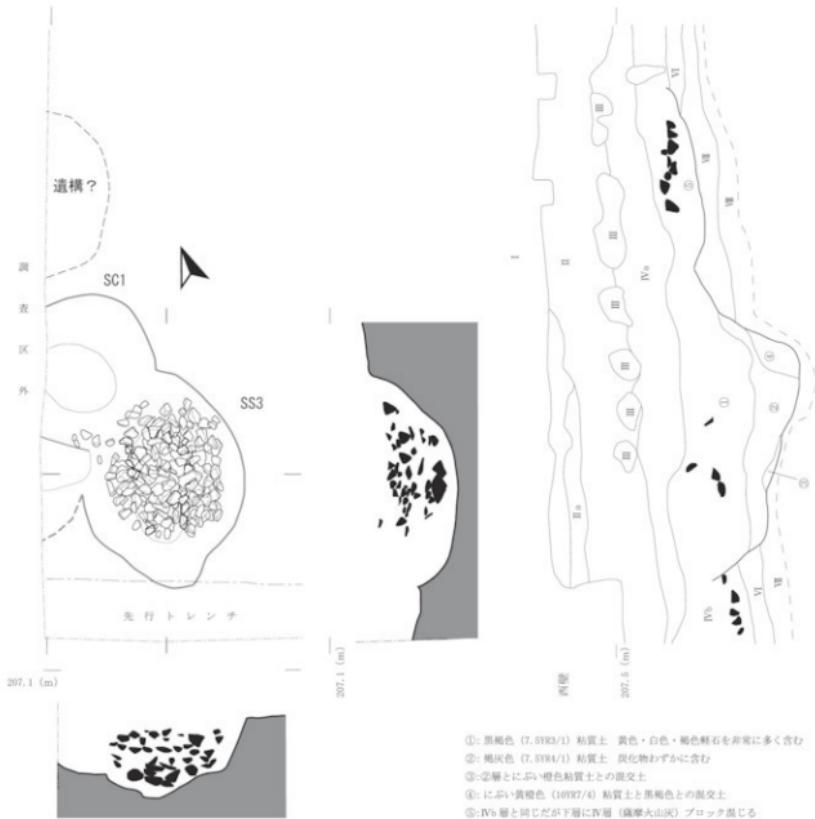
II 土坑（第10図）

SC1（第10図）

調査区の南西隅で検出された土坑である。SS3と切り合いが認められ、遺構の半分程度は西側の調査区外へと伸びている。遺構プランは楕円形を呈しており、長軸×短軸 = $14 \times 0.5 (+ a)$ (m)となる。遺構の南半にはステップ状の段落ちが見られる。遺構埋土はIV b層を基本とするものでレンズ状の堆積が認められた。下層埋土は下位の基本土層と混交した状態で堆積しており、少量の炭化物が混じっている。

遺構断面形は緩やかな箱形を呈しており、検出面からの深さは最大で0.5(m)を測る。掘り込みはⅣ層中にまで及んでいる。SC1とSS3との切り合い関係は不明であるが、土層の特徴が似通っていることから、ほぼ同時期の所産と推察される。本来は集石遺構として使用されたものが、礫の廃棄に伴って掘り込みのみが残存している可能性がある。なお、SC1からは遺物は出土していない。

また、SC1の北側を精査したところ、遺構と思われるIVb層の落ち込みも確認できた。この上位では礫がやまとまって検出されている。この地点はVI層（薩摩火山灰層）が粗いブロック状となっており、明瞭な堆積を成していなかった。そのため、この検出面において平面的に遺物包含層か遺構埋土かを判別することはできず、遺構を面的に捉えることはできなかった。しかし、調査区西壁の土層を観察した結果、VII層を切るような形でIVb層の落ち込みを確認することができた。



第10図 SS3・SC1実測図 S=1/30

III 土器の集積（第11図）

SX1（第11図）

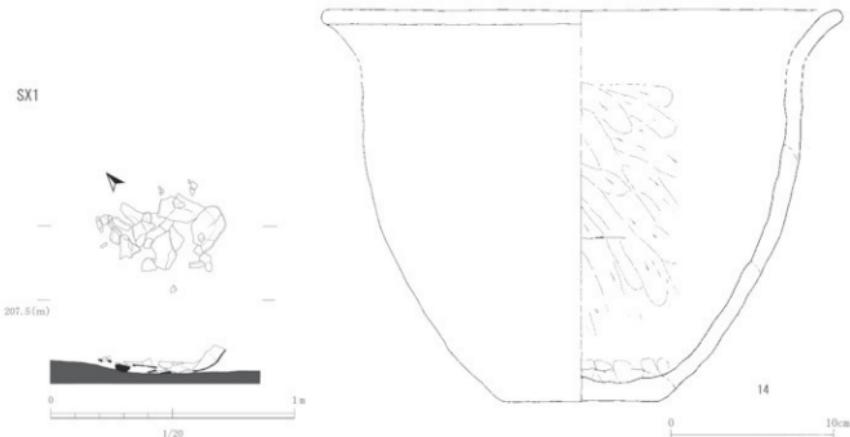
調査区中央の東壁付近で検出された。IV層の掘り下げ時に土器片がまとめて出土したことから、何らかの遺構がある可能性を考慮して周辺を精査した。出土した土器は完形に図上復元できる個体で、横倒しになったものが土圧で潰れたような状態であった。VI層上面まで周辺を掘下げた後に精査し、掘り込みの有無も確認したが検出されなかった。そのため埋設土器などの遺構として捉えることができるかは不明である。周囲からは比較的多くの破片が出土しているが、これと接合するものはほとんどなかった。

出土した土器は縄文土器の深鉢と考えられる個体である。出土した時点で崩れやすく、非常に脆弱な状態であった。その為、出土状況を実測図化した後、バインダーを数回塗布・含浸させて固形化を試みたものの、土器取上時には一部が崩れて細片化してしまった。

SX1出土土器（第11図）

SX1で検出されたのは、縄文土器の深鉢（14）である。口縁部は短く外反し、緩いカーブを描きながら底部へと至るバケツ形の器形を呈する。底部は平底である。復元した器高は23.8cm、口径は31.5cm、底径は9.5cmを測る。胴部への施文は認められず、無文でナデによる調整が認められるのみである。胴部内面には斜位の粗いケズリが認められ、ケズリ痕が明瞭に残されている。胴部外面中位にはススが広く付着し、胴部内面下半から底部にかけてはコゲも残っている。

焼成は良いとは言えず、軟質で非常に脆くなっている。胎土中にはキンウンモが多く含まれており、目立っている。



第11図 SX1・出土土器実測図 S=1/20・1/3

IV IV層出土遺物（第13図～第15図）

IV層中における遺物の出土状況は、その平面分布をみると、完形に近い土器が出土したSX1の周辺で土器がやまとまって出土している。このほか調査区内からまんべんなく出土しており、特定箇所に偏って出土するといった傾向は認められなかった（第12図）。

IVa層は部分的に堆積しているのみであったことから、大半の遺物はIVb層からの出土であり、V層からの遺物出土は認められなかつた。

出土遺物は土器が大半を占めており、石器類の出土は少量である。この他にはごく少量の炭化物が出土しているのみである。石器は打製石鎌とその未製品、剥片石器、剥片、使用痕のある剥片、磨石・敲石が出土している。

出土した剥片は石器製作に伴って生じたものと思われ、石材種には黒曜石のほかチャート、頁岩、安山岩が混在しているほか、ホルンフェルスと思われるものが出土している。

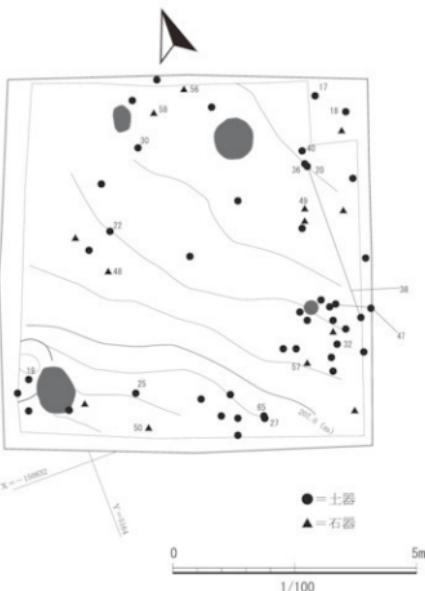
IV-1 土器（第13図・第14図）

IV層出土土器で確認された型式は、石坂式土器と考えられる土器、辻タイプ、押型文土器、撲糸文土器、変形撲糸文土器、手向山式土器、塞ノ神B式土器である。この中でも塞ノ神B式が多く出土しており、出土土器の主体となっている。次いで多く出土しているのは撲糸文土器、押型文土器に該当する一群である。これ以外の土器型式の出土量は少なく、点的な出土にとどまっている。これらの出土層位には大きな差異は見られず、IVa層・IVb層の両層から出土しており、混在して出土している。しかし、その出土レベルをみると塞ノ神B式がわずかに上位から出土する傾向も認められた。その他の型式では出土分布に差は見られなかった。

15・16は胴部外面に斜位の条痕文が認められる。小片のため確定できないが石坂式土器と考えられるものである。17・18は外面にハ字状の短沈線文を施文するのが特徴でいわゆる「辻タイプ」と呼ばれる土器に該当する。17は口縁部で口唇は平坦となる。外面にはミガキが見られ、内面はケズリ調整である。焼成は良い。18も17と同じように外面に短沈線文が施文されており、両者の施文具は非常に似通っていることから、これらは同一個体の可能性もある。

19・20は外面に沈線文が施文されるもので手向山式土器に該当する。両者とも胴部と考えられる破片で内面にはケズリが認められる。21は繩文が施文される胴部片である。（L R）の単節繩文が斜位に施されている。小片のため繩文の単位は不明である。手向山式土器もしくは平柄式土器に該当するものと考えられる。

22～25は押型文土器である。22は頸部に近い胴部片と考えられ、外面に横方向ならびに斜位の楕円押型文が施文されている。内面にも横方向の楕円押型文が施文される。胎土中には角閃石が認められる。



第12図 IV層遺物出土状況平面図 S=1/100

焼成も良く硬質である。23・24には縦方向の楕円押型文が施文されている。25には縦方向の山形押型文が施文される。胴部でも下半と考えられる破片である。

26は頭部付近と考えられ、くびれ部分にわずかではあるが撲糸文が残っている。27～30は変形撲糸文土器として一括した。27は胴部で内面にコゲが付着している。28は胴部で変形撲糸文が施文され、横方向にナデ消された箇所がある。29は内面に横方向のケズリが見られる。30は胴部で「8字」状の変形撲糸文が斜位に施文される。31は胴部で斜格子状の撲糸文が縦方向に施文される。内面にはケズリのちナデが加えられている。胎土中には多くの砂礫が混じり、焼成は軟質となっている。胴部でも中位の破片と考えられ、外面にはススが付着している。

32～47は塞ノ神B式土器として一括できるものである。32は口縁部で口唇に貝殻による刺突文、外面には沈線文が認められる。焼成も良く硬質である。33は刺突文が認められる。34は頭部で接合面を境に割れている。外面には斜位の沈線文が交差して施文される。35は口唇に刺突が認められる。36、37は頭部付近と考えられる破片で、外面には貝殻による連続刺突文が施文され、37には沈線文も認められる。38は口縁から胴部にかけての破片であり、復元口径は28.5 cmを測る。口唇部には貝殻による刺突文が認められ、胴部外面には斜位の沈線文が施文される。内面はケズリのちナデが施される。39～44は胴部と考えられる破片で沈線文・連続刺突文が施文される。42、43は太めの工具を用いて斜位に沈線文が施文される。色調、胎土ともに似通っていることから同一個体と思われる。45は胴部で貝殻による列点文が間隔をもたせながら廻らされている。下半には斜位の条線も認められる。内面には非常に粗いケズリが横方向に施されている。胎土中にはキンウンモが多く入っている。46は施文が認められない無文の胴部片である。内外面ともにナデが認められるのみである。47は胴部から底部にかけての資料である。上位には貝殻による連続刺突文が施され、それよりも下位には横方向の条線が施文されている。内面は丁寧にナデされている。焼成も良く硬質となっている。

IV-2 石器（第15図）

IV層から出土した石器は打製石鎌および未製品、剥片石器、剥片、磨石・敲石である。いずれも数点ずつの出土であり、出土点数は多くはない。出土石器中最も多く出土したのは剥片である。また、剥片を素材とした剥片石器も少量ながら出土している。

出土した石器石材には黒曜石、チャート、ホルンフェルス、安山岩、頁岩等が認められる。黒曜石は出土量こそ少なかったものの、大きく2種に分類することができる。一つは不純物をあまり含まず、光沢が強いもので光を透過しても半透明で光をほとんど透過しないものである（便宜的に黒曜石Aとする）。そして、もうひとつは内包物に不純物がやや多く含まれるもので、光沢が弱く、光を透過すると透明色あるいは青色もしくは灰色になって見えるものである（便宜的に黒曜石Bとする）。黒曜石A、黒曜石Bとともに実測図化にも耐えない細かな剥片がほとんどである。

その他の石器石材のうち、チャートは大きく2種に分けることができ、白色系のもの、黒色系のものに大別することができる。いずれも出土点数は少ない。さらにこれ以外の石材についてみると、磨石には砂岩系の石材が多く用いられていることが分かる。

打製石鎌・石鎌未成品（第15図）

打製石鎌は未成品も含め3点出土した。48は完形の打製石鎌である。IV b層下部から出土した。凹基式で両側縁がわずかではあるが湾曲している。石材はホルンフェルスと思われる。49は薄い安山岩を素材としており、製作途中で半分ほど欠失したものと考えられる。50は白色のチャートを素材としており、

右側縁のみの加工で終了している。

剥片（第15図）

51は白色のチャートを素材とした剥片である。側縁に複数回の剥離が見られることから、何らかの石器未成品の可能性がある。52は右側縁に微細剥離が認められる。使用痕のある剥片として掲載した。石材は白色のチャートの可能性があるが確言できない。53は黒曜石Bの剥片で左側縁に湾曲状の加工が見られ、微細剥離が見られる。

剥片石器（第15図）

54は台形状の黒色チャートを素材とした剥片石器である。上下両側縁に微細剥離が認められることから、何らかの使用があったことが分かる。55は頁岩の剥片を素材としている。下側縁にのみ微細剥離が認められる。

磨石・敲石（第15図）

磨石は3点掲載している。56は砂岩の磨石・敲石で半分ほど欠損している。背面には敲打痕が広く残っている。57は完形の磨石で全面に磨面が見られる。58も砂岩の磨石で半分に割れているが、残存部には全面に磨面が見られる。

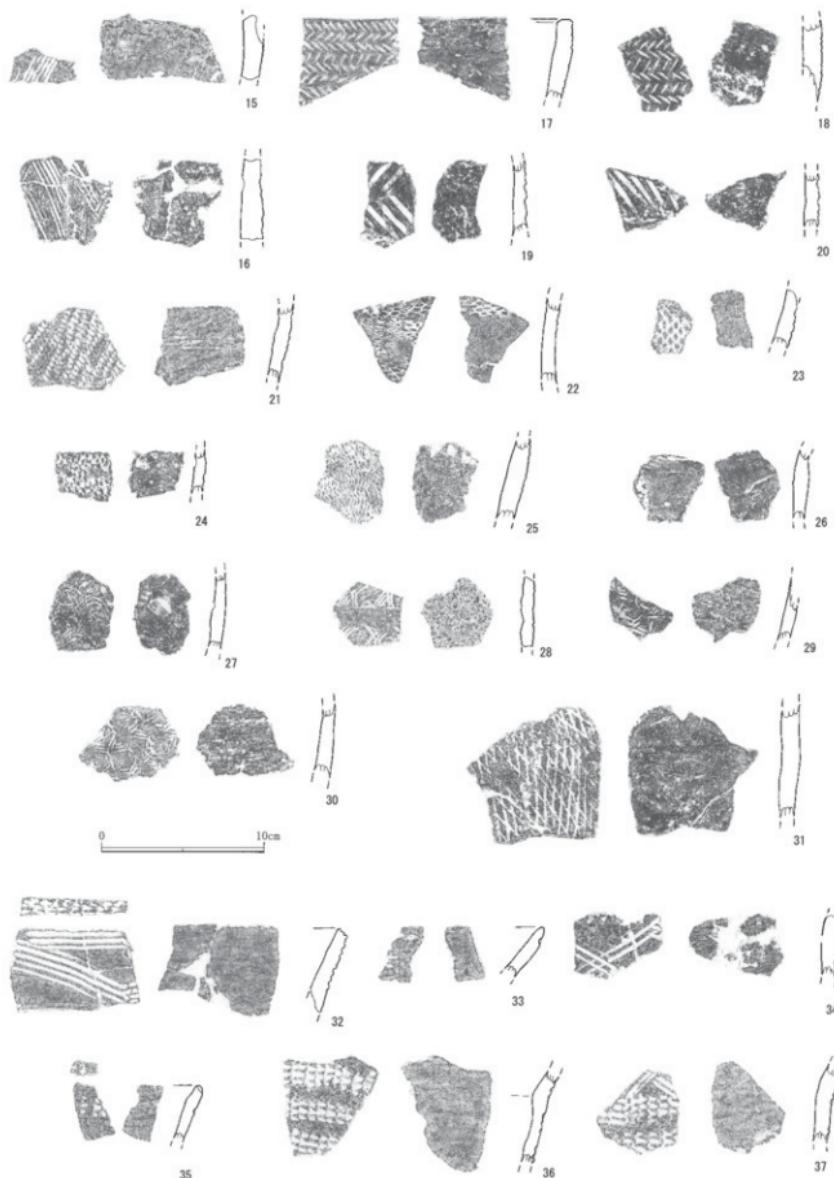
軽石（第15図）

IV層からは用途不明の軽石も出土している。59は面取りされた軽石に未貫通の穿孔が見られる。用途は不明である。

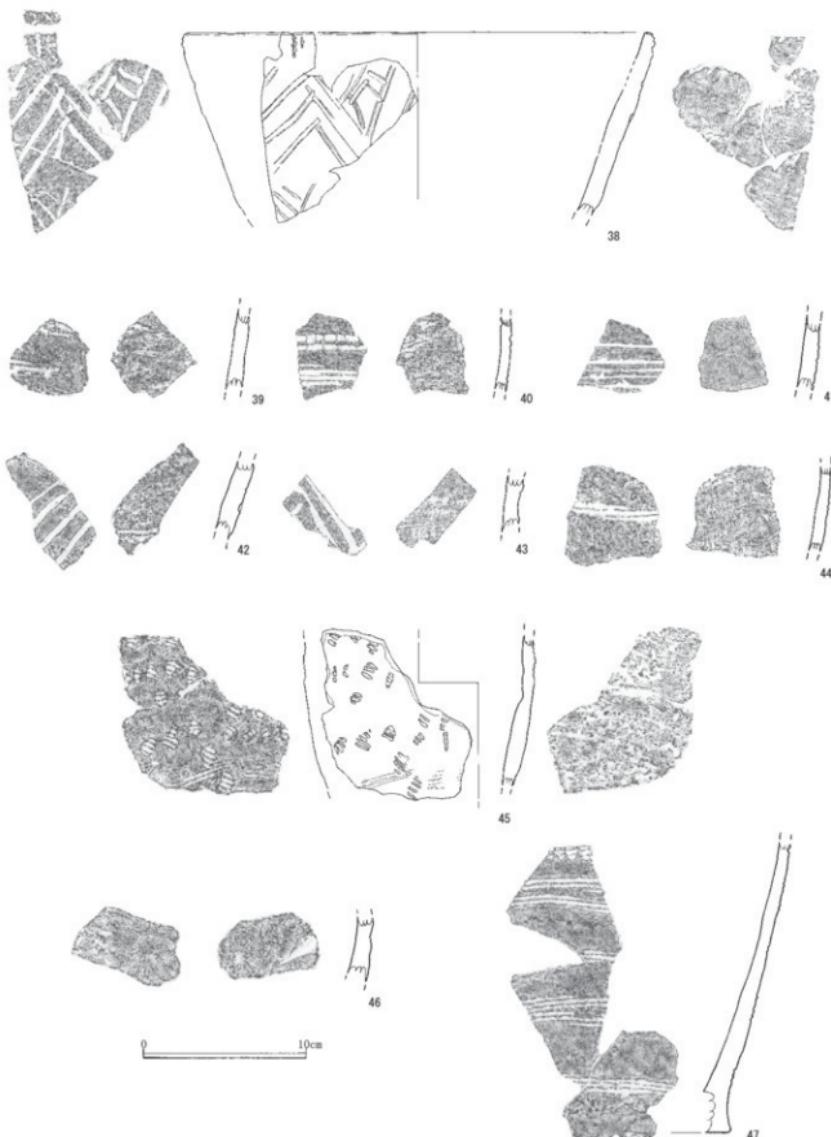
5時期不明の遺物（第15図）

打製石斧（第15図）

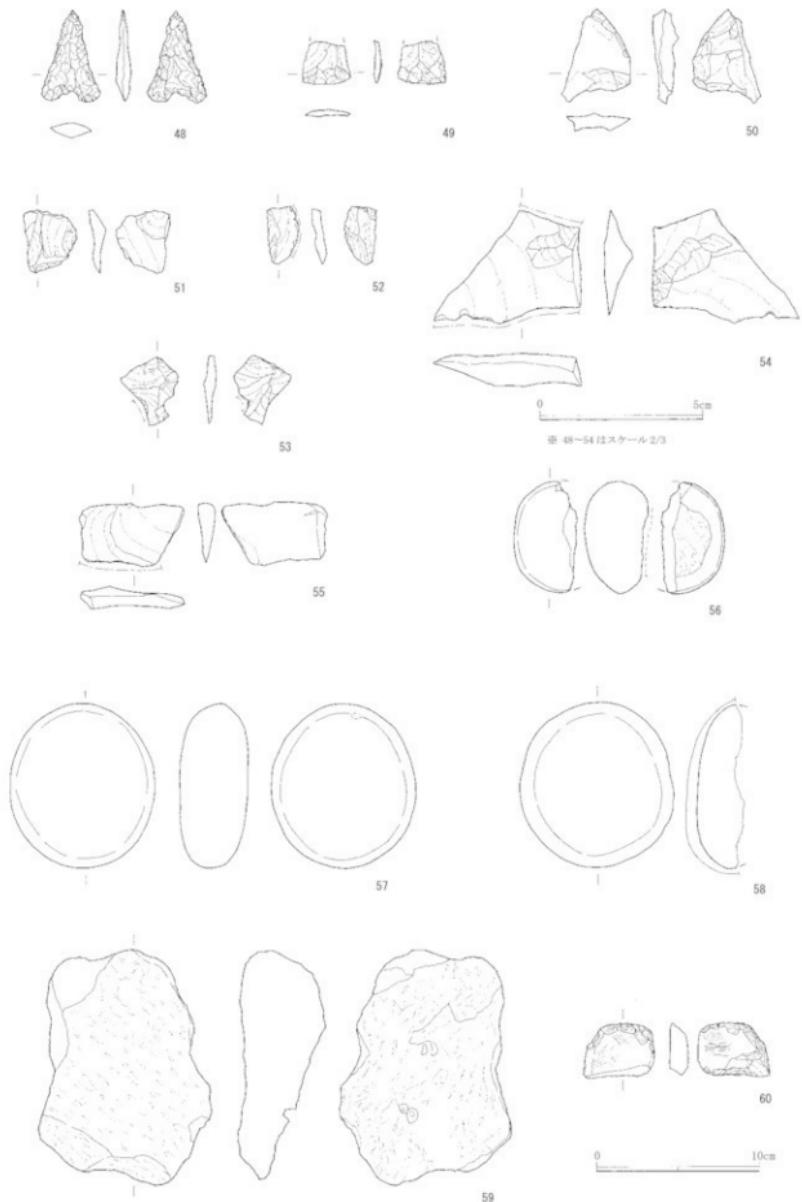
60は調査区外で採集された打製石斧である。折れた部分に加工を加えて刃部を作出していることから、破損した打製石斧を礫器として転用したものと思われる。石材はホルンフェルスを使用している。採集品であるため、時期は不明である。



第13図 IV層出土遺物（土器）S=1/3



第14図 IV層出土遺物（土器②）S=1/3



第15図 IV層出土遺物・時期不明の遺物（石器）S=2/3・1/3

第4章 調査のまとめ

川原谷出土遺跡の発掘調査の結果、薩摩火山灰層（VI層）を挟んで縄文時代草創期の遺物、縄文時代早期の遺構・遺物が検出された。調査区が狭小なため様相は不明ながら、この地域に当該期の集落が存在していたことが明らかとなった。以下、今回の調査結果について簡単にまとめておきたい。

まず、縄文時代草創期についてみると、遺構は検出されなかったものの、遺物が少量出土した。出土土器は小片が多かったが図化できたものはすべて実測図を掲載した。時間的な指標となりそうなものは、隆帯文が貼付される1のみであるが、小片のため詳細な時期は判然としない。都城市内では近年、山之口町王子山遺跡において当該期の集落跡が見つかっており、隆帯文土器がまとまって出土している（都城市教育委員会 2012）。今回出土した土器は王子山遺跡のものと比較しても色調・胎土がともに似通っており、概ね同時期の所産としての可能性もある。

石器についてみると、黒曜石の石核、剥片が出土していることから、これらを利用して打製石器などの石器製作も行なわれていたものと考えられる。

次に縄文時代早期についてみると、該期の遺構は集石遺構3基、土坑1基が検出された。出土した土器は数こそ少なかったものの、複数の土器型式（石坂式土器と思われる土器、辻タイプ、手向山式土器、押型文土器、変形撫糸文土器、塞ノ神B式土器）が認められた。これらは概ね縄文時代早期中葉から後葉にかけての時期に該当するものである。上記以外で特徴的なのは、胴部に網目撫糸文を施した土器（31）で都城市内では初出と考えられるものである。本遺跡周辺では鹿児島県曾於市桐木耳取遺跡に類例が見られ、同遺跡の報告では、このタイプの資料について押型文土器と施文手法に共通性があることが指摘され、両者の同時性も示唆されている（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005）。この資料1点のみで断定することには慎重にならねばならないが、本遺跡でも押型文土器が出土していることから、この時期と併行している可能性も考えられる。また、SX-1から出土した無文の深鉢形土器（14）であるが、このような土器については類例を知らない。器形および内面調整の特徴から類推して、この資料も押型文土器と近接した時期（縄文時代早期中葉）に位置付けておきたい注1)。

縄文時代早期の出土土器中最も多く出土した塞ノ神B式土器であるが、これらは高橋信武氏の編年（高橋 1997）に照らし合わせると、塞ノ神III式から塞ノ神IV式に該当するものが大半といえる。

石器について見ると、これも出土量は少ないながらも打製石器およびその未成品、磨石・敲石、剥片が確認された。磨石・敲石が出土していることから、植物質食物の利用があったことも認められ、遺跡には一定の定住性があったことも伺い知ることができる。

縄文時代早期の検出遺構は集石遺構がほとんどであるが、土坑SC-1も集石遺構使用後に礫を抜き取った後の遺構とも捉えうる。のことから、調査地点の周辺は主に集石遺構が使用された空間であったと考えられる。

以上のことから、今回の調査地点は集落でも周縁部付近にあたるエリアと考えられる。調査区よりも南側は切り立って斜面となっていることから、その中心は北側の台地平坦面に展開していたものと推察される。

注1) 山下大輔氏の押型文土器編年（山下 2009）における第4段階の「白ヶ野類型」資料との関連が想起される。

【引用・参考文献】

南宮瑞生 1994 「南九州縄文時代草創期土器編年」『南九州縄文通信』8 南九州縄文研究会

高橋信武 1997 「平橋式土器と塞ノ神式土器の編年」『先史学・考古学論究Ⅱ』 嶺田考古学会

山下大輔 2006 「南九州の押型文土器編年に関する一考察」『南の縄文・地域文化論考』新東見一代遺跡記念論文集上巻 南九州縄文研究会・

新東見一代遺跡記念論文集刊行会

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005 「桐木耳取遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 9

都城市教育委員会 2012 「王子山遺跡」都城市文化財調査報告書第107集



縄文時代草創期遺物出土状況（北から）

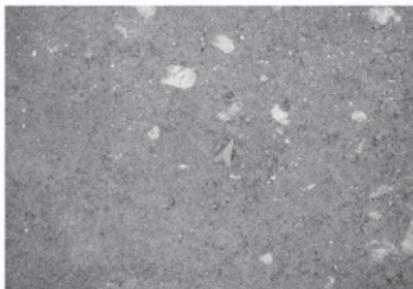


縄文時代早期遺構検出状況（北から）

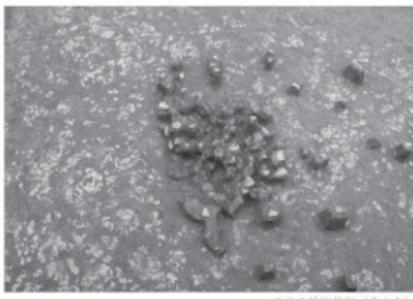
図版 2



調査区東壁上層



IV b 刷打製石器 (48) 出土状況



S S 2 検出状況 (北から)



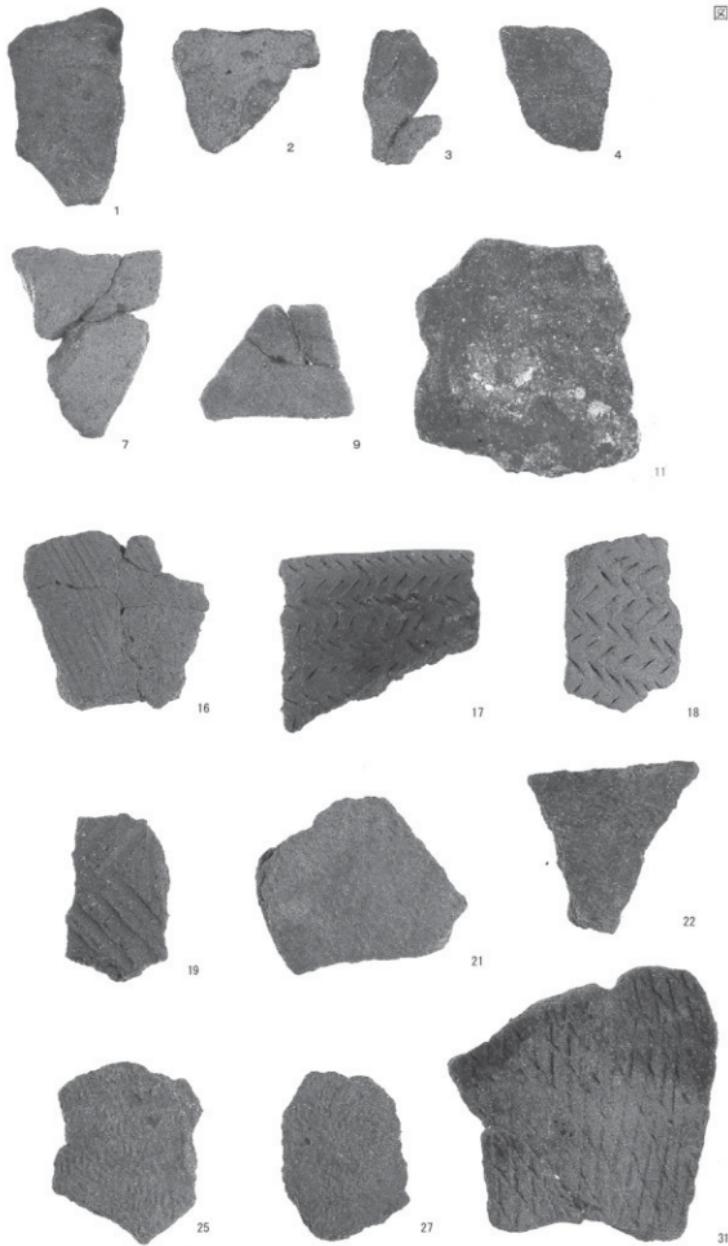
S S 3 検出状況 (南から)



S X 1 検出状況 (北から)



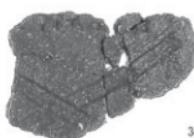
S S 3・S C 1 完形状況 (南から)



図版 4



32



34



37



38



36



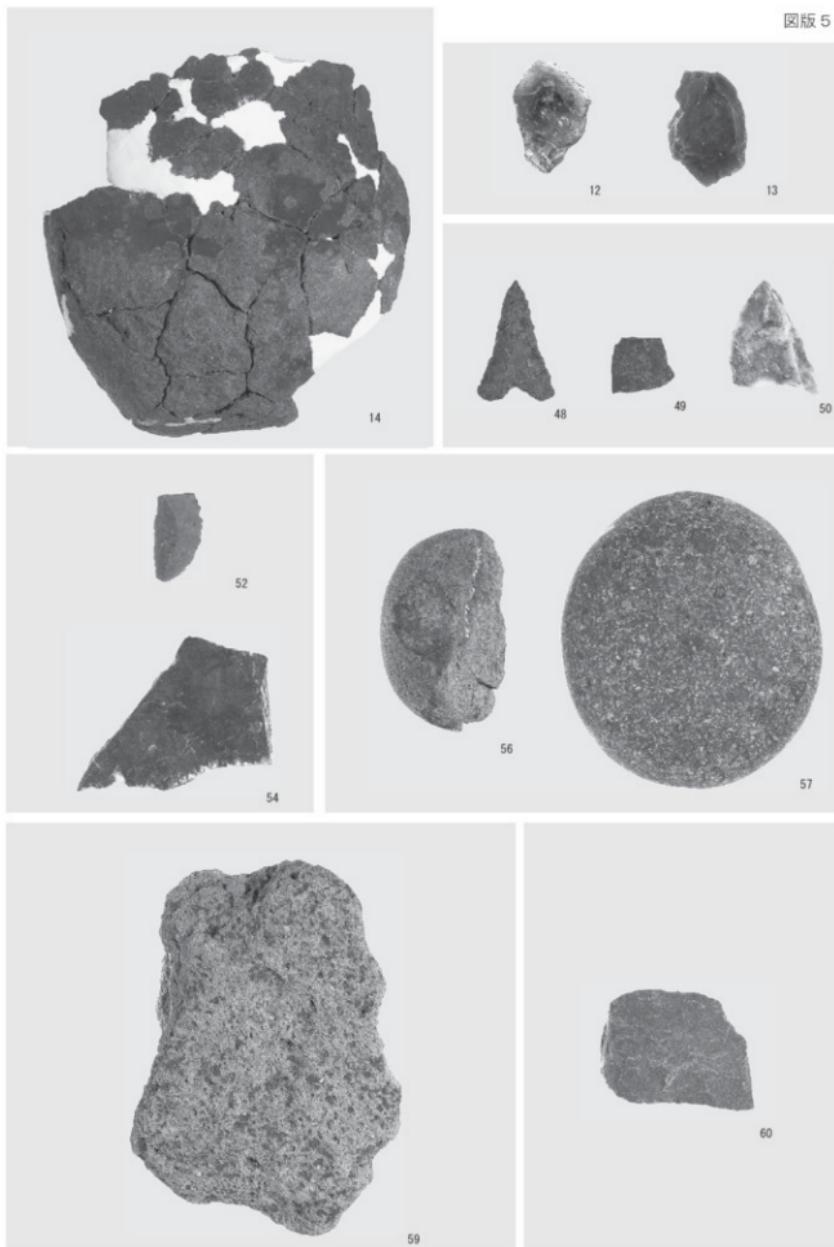
40



45



47



報告書抄録

ふりがな	かわはらだにでみずいせき							
書名	川原谷出水遺跡							
副書名	携帯電話無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	都城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 112 集							
編著書名	加賀淳一							
編集機関	都城市教育委員会							
所在地	〒885-0034 宮崎県都城市菖蒲原町 19-1 TEL 0986-23-9547 FAX 0986-23-9549							
発行年月日	2014 年 3 月 14 日							
所取遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査機関	面積	調査原因	
		市町村						遺跡番号
かわはらだにでみずいせき 川原谷出水遺跡	みやざきけん 都城市 うめきた 梅北町 11125番地 2	45202	M7021	31° 38' 23" 付近	131° 3' 15" 付近	H25 3.13 ~ H25 4.8	64m ²	携帯電話無線基地局建設
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
川原谷出水遺跡	集落跡	縄文時代草創期 縄文時代早期	集石遺構 土坑 土器の集積	縄文土器 石器				
要約	<p>川原谷出水遺跡は都城市梅北町に所在する。携帯電話無線基地局建設に先立ち本発掘調査を実施した。</p> <p>川原谷出水遺跡は大淀川右岸のシラス台地縁辺付近に位置しており、標高は約 207 m ~ 208 m ほどである。</p> <p>今回の発掘調査は鬼界アカホヤ火山灰層よりも下位を対象として調査を実施した。発掘調査の結果、薩摩火山灰層（VI 層）よりも下位、縄文時代草創期に該当するⅣ 層から量が少ないながらも土器、石器が出土した。この時期の遺構は検出されなかった。</p> <p>縄文時代早期に該当するⅣ 層からも土器・石器が出土し、集石遺構 3 基、土坑 1 基が検出されたほか、完形に近い土器が土圧で潰れたような状態で出土した。遺物は土器・石器がやまとまって出土した。Ⅳ 層中から出土した土器は縄文時代早期中葉から後葉にかけてのものである。断定できた土器型式は石坂式土器と思われる土器、辻タイプ、手向山式土器、押型文土器、変形撚糸文土器、塞ノ神 B 式土器である。石器は打製石鏃およびその未成品、磨石・敲石、剥片等が出土した。</p> <p>調査の結果、縄文時代草創期から早期にかけての集落が展開していたことが明らかとなった。特に縄文時代草創期の資料は、未だ都城市内での出土例も少ないため重要な事例となつた。</p>							

都城市文化財調査報告書第112集

かわはらだに でみづ

川原谷出水遺跡

—携帯電話無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2014年3月14日

編集 宮崎県都城市教育委員会 文化財課

発行 〒885-0034 宮崎県都城市菖蒲原町 19-1
TEL (0986) 23-9547 FAX (0986) 23-9549

印刷 株式会社 みやこ印刷

〒885-0026 宮崎県都城市大王町 51-22
TEL (0986) 23-1682 FAX (0986) 22-1682